

# 印象主義作家ペーター・アルテンベルク

－その文学の伝記的・社会的背景について－

田 中 ま り

今世紀における科学的・文化的発展の基礎となった発見・思想の多くが、世紀末ウィーンで生まれている。心理学では、精神分析の基礎が築かれ、特に無意識の発見が、二十世紀の人文科学に大きな影響を与えた。また、ヴィトゲンシュタイン等による、言語に関する哲学的な考察も、その後の哲学に新たな方向性をもたせたといえよう。音楽・美術方面では、新しい表現や、実験的な試みが行われ、二十世紀初頭の活発な活動の下地を作りつつあった。建築においては、アードルフ・ロースの装飾性を廃した合理的な造形の試みが、後の欧米の建築に引き継がれているのを見ることができる。同様にドイツ文学においても、この時代の実りは大きい。ウィーンは重要な文化的拠点であり、多くの優れた作家が生まれている。人間心理に深く切り込み、その描写を行ったシュニッツラー、古典的な伝統を踏まえながらも新しい時代の精神状況を描こうとしたホーフマンスタール、時代や文明に対して鋭い批判を行ったカルル・クラウス、そしてまた彼らの周辺の、ヘルマン・パールを中心とする「若きウィーン派」である。ツヴァイク、ヨーゼフ・ロートといった作家も、この時代の遺産を色濃く受け継いでいる。

これらのウィーンの作家たちの中でも、特にペーター・アルテンベルクは、印象主義の典型的な人物と見られている。その作品の形式は、いわゆる「電文スタイル」を積み重ねた短いスケッチで、感覚・ニュアンスの多様化のために、形容詞、合成語、外来語、独特の擬音語、独創的な比喻など、様々な語彙的、文法的、修辭的手段が用いられている。正に、鋭い感覚で外界の刺激をそのまま描き出そうとする印象派の理念を体現したかのような文体である<sup>1)</sup>。一方、彼の生涯はむしろ、その作品よりも衆人の耳目を集めたようである。定職もないまま、知的好奇心のおもむくままに、種々の学問に手をそめるものの、それに没頭することなく投げ出すディレクタント的な態度、カフェーに入り浸りのボヘミアン生活は、あたかも世紀末の大都会ウィーンの申し子のような人生といえるであろう。このような生活態度は、彼の作品の、上記のような傾向の背景になったと思われる。本稿ではペーター・アルテンベルクの生涯を概観しながら、その印象主義的な文学形式を選択させた背景に注目したい。なお、知識社会学的な考え方に沿って整理するなら、考察の中心となる作家について、彼の作品そのもの、本人が受けた影響、さらに彼が与えた影響、といった三つの次元について論ずる必要があるが、ここでは彼が受けた影響を中心に考察を進めることにする。その際、彼の家庭環境や教育状況といったミクロ的な影響だけでなく、当時の社会的、文化的背景を含めたマクロ的な影響を見ることで、「印象主義」芸術発生の一つのモデルを明らかにできるのではなかろうか。他の二つの次元

については、稿を改めて考察する予定である。

### 1. 出身社会層—ユダヤ系出自とウィーン富裕市民階級

ペーター・アルテンベルク（本名リヒャルト・エングレンダー Richard Engländer）は、1859年3月9日、裕福なユダヤ系商人モーリッツ・エングレンダーの長子として、ウィーン第二区レオポルトシュタットのフェルディナント通り二番地で生まれた。本が好きで、毎朝仕事の前に必ず読書の時間を取ったという父親は、自分が感動したシェークスピアの国王劇に因んで、初めての息子に、誇りと、深い愛情を込めてリヒャルトと名付けたのである。この父の仕事は、アルテンベルク自身の記述によれば（GAB,S.9）、クロアチアの農産物を扱う大きな卸売り店の経営であった。彼の妹の証言を加えると、その店は先代から引き継いだもので、しっかりした経営方針で発展してきたらしい。父モーリッツは、子供たちから見ると、大変善良で、正義感の強い人柄であったという。母パウリーネも商家の出身であった。エングレンダー家にはリヒャルトの他に、パウル（生後ほどなく死亡）、マリー、ゲオルク、マルガレーテと、四人の子供が生まれている。そのうち、最も年の近い妹マリーは、彼についての回想を記しており、彼の家庭環境を知る上で貴重な資料となっている。彼女の記述によれば、エングレンダー家はかなり裕福な暮らしであり、子供達も何不自由無く育ったようである。

ペーター・アルテンベルクの育った家庭は、当時のウィーンの中産階級でも特に裕福な層であった。十九世紀の半ばから、オーストリアでも少し遅れて工業化が進行し、それに伴う経済の発展により、新興の市民勢力が勃興してきた。しかし、ショースキー等が指摘するところによれば（21頁以下）、彼等が他のヨーロッパ諸国と異なっていたのは、貴族がまだ政治の中心に大きな影響力を持っていたことであり、その結果、彼等自身は無力感を覚えることになったことであった。その無力感はやがて貴族への憧れ・同化願望を呼び、結局は貴族的教養を身につけることで、なんとか自分たちの欲求を満たそうとした。つまり文学や演劇、音楽、絵画といった諸方面の芸術に対する興味が高まったのである。夏にはウィーンを離れた田舎の館に出掛けるのが貴族の習慣であったが、それも市民たちによって「真似」られたようである。アルテンベルクのスケッチにも夏の終りにウィーンに居る人々は、少し自分たちが落ちぶれたように感じるというくだりがある（SUP, S4ff.）。

このような新興勢力には、アルテンベルクの父親のようなユダヤ人も多く含まれていた。ジョンストン（40頁以下）によれば、オーストリアでは工業化の始まった時期と、ユダヤ人解放の時期が一致していたために、彼等も資本主義経済における競争に、最初から加わることができたということである。そのために彼等の一部は経済力を持つに至ったのであるが、当時経済的に没落しつつあった職人や商人、農民層にとっては、ユダヤ人こそ諸悪の根源とも見えたりした。また帝国東方の諸州では、各民族が民族主義に目覚め、独立を唱え始めており、中央はそれら民族間の対立に対抗するように、非民族的な姿勢を打ち出すこととなった。その結果、ユダヤ人に対して、少なくとも公式的には比較的寛容となり、彼等が社会的に進出することが可

能になった。一方、東方のユダヤ人は、もともと経済・文化の中心地に集まる傾向は存在してはいたが、各地の民族的対立の激化によって、さらにその傾向が強まり、大量にウィーンへと流入して来たようである。ウィーン東駅周辺のレオポルトシュタットは、この様にしてやってきた東方ユダヤ人が住みつき、一種の自主的なゲットーを形成していたとヨーゼフ・ロートは書いている（44頁）。この大量のユダヤ人流入は、やがて在来のドイツ系ウィーンの中流市民の不安・反発を招くこととなる。この様な大衆の心理を見抜き、ユダヤ人排斥を叫んで市長になったのがルエーガーである。これに対しテオドール・ヘルツルは、ドレフュス事件や、国内の反ユダヤ主義的な動きに危機感を覚えて、シオニズム運動を提唱し始めたのである。

フランツ・ヨーゼフ皇帝が、ロートが小説において称えているような、超民族主義的な理念を抱いていたとしても、このような状況では、ユダヤ人、或いはユダヤ系の人々にとって、オーストリアは安住の地とはなり得なかった。彼等は自分の住む土地に、国民としての所属感を抱くことが出来なかったのである。ユダヤ人の青年層にとってこれは、自らのアイデンティティにまつわる大問題であった。彼等は自分の出身層であるユダヤ的な価値観を身に付ければ、住んでいる土地に順応することは不可能となり、かといって住んでいる国の価値観を全面的に受け入れる事もできなかった。特に国家主義を体現する軍隊は彼等にとって本来疎遠のものであり、軍隊も彼等を歓迎しなかったらしい。住んでいる土地に多数の民族が混在し、対立している場合には、この事情はさらに複雑なものになった。この様な寄る辺なき不安は、多くのユダヤ人のインテリをインテリたらしめた（ジョンストン（37頁以下）は指摘している）。すなわち彼等は他の民族に対して知的優位性を獲得することにより、周囲の「偏見を見返すよう」に期待されていたということである。従って親達は教育熱心であり、国民としての義務を果たすことよりも、子供に向かって、その情熱を注いでいたといわれている。

アルテンベルクの家庭においては、ユダヤ的な伝統は、すでに陰をひそめていたようであるが、彼の父親もこのような不安感は共有していたであろう。1870年の普仏戦争の際に心の故国フランスの命運に心を痛めた彼にとって、幾度もプロイセンとの接近を計っていたオーストリアは、決して国家的な所属感を感じさせる存在では無かったと思われる。子供達に対する彼の熱心な教育態度は次章に述べるが、そのような態度の背景に上記のような社会的な動きの影響があったとしても不思議ではない。

## 2. 家庭と教育環境—特異な素質とその展開

エングレンダー家は、その後フェルディナント通りから、ヴィルトプレートマルクトの側のベルガルデ・ホーフ、さらにベルゲルへと移っていったが、その間に上の二人の子供の教育が開始された。二人の家庭教師が子供のために雇われ、読み書きを教えた。こうしてアルテンベルクは、ギムナジウムに上がる前の小学校時代をほとんど家で過ごした。一度学校に通ったこともあったが、早速風邪をひいたため、再び家庭教師に切り替えたようである。この子供時代、彼はすでに神経質な面があったらしく、自ら「並外れて臆病な子で、ほとんど病的といっても

## 田 中 ま り

よいくらいだった」(GAB, S. 9ff.)と述べている。彼は良くしつけられ、利発でもあったが、体つきは華奢で、病弱だったらしい。生来の可愛らしさに加え、彼のこのような身体的素質は、母親との結び付きを一層強めたとみられる。殊にギムナジウムに入ったその年に、彼は足の骨炎のために家で長期にわたる療養生活を余儀無くされているが、その際に彼は母親の寝室の隣のサロンに移されたということである。これなどは、母親の自慢の息子に対する愛情が、よく感じられるエピソードといえるのではないだろうか。

自らも文学に親しみ、豊かな教養を身に付けていた父親は、子供たちの教育にも熱心であった。しかし彼は、教条主義的に子供に暗記を強いるのではなく、学問・自然一般に対して、自発的な興味を持たせるやり方を好んでいたようである。例えば、エングレンダー家で休日の午後に行われていたという子供部屋での「印刷ごっこ」などは、その好例といえるであろう。このことについては妹のマリーが、その『思い出』で詳しく語っており、その遊びの際に未来の作家自身によって朗読された、恐らく彼の生涯最初の作品と見られる詩の断片が引用されている。また絵画の鑑賞のために画廊を訪れたり、ブルク劇場での観劇といったこともすでに行われていたようである。幼いアルテンベルクにとって、ブルク劇場での「サッフォーの夕べ」はとりわけ印象に残ったということである。文学的な教養だけではなく自然科学への興味を養うことも、父親は忘れなかった。夏の休暇は1870年以来、避暑地ライヒェナウのホテル「タールホーフ」で過ごされ、子供たちはウィーンの街中とは全く異なる豊かな自然の中で、家庭教師と共に様々な自然観察を行ったようである。

子供達の家庭教師を選ぶ際に、単に或る教科を教える教師ではなく、子供が真に尊敬でき、友人とすることが出来るような指導者を選んだことも、彼の父親の大きな功績といえるであろう。特にウィーン大学の眼科学の教授となったケーニヒシュタイン氏は、アルテンベルクにとって忘れ難い家庭教師であった。彼の妹の回想にも「あの家庭教師」と強調されている彼は、アルテンベルクがギムナジウムに上がった年からエングレンダー家に招かれ、夏の休暇の際も家族に同行したようである。子供たちの父親は、教師たちを自らの友人として遇していたということで、その事も子供たちと教育者たちとの間に伸びやかな関係を作る役割を果たしたに違いない。

ギムナジウムの上級時代になると、アルテンベルクは思春期の急激な変化の中で、自分の位置を見失っていたようである。様々な少女たちへ思いを寄せ、白昼夢に耽ることも多く、勉学は滞りがちであったという。この傾向はすでに少年時代から見られたが、ここにきて顕著になってきたということであろう。彼の後年のスケッチにおける、細かい女性観察や、多くの女性への憧れや淡い想いなどの、夢に近い心理を綴る描写を見ると、彼の女性についてのイメージの多くは、この時期に形成されたのではないかと思われる。ギムナジウムの最後の年に、アルテンベルクは貴重な友人を得て心の平静さを取り戻す。その友人一家が住むドナウ河畔のアルテンベルクー彼のペンネームはこの地名に由来する一は、彼にとっての楽園となり、この頃、何度もこの地を訪れたということである。ギムナジウムの卒業試験は1877年に行われ、彼は懸

命に勉学に励んだということであるが、残念ながらラテン語の成績が悪く、半年後に全科目を受け直さなくてはならなかった。その試験でやっと、彼はギムナジウムを卒業することができたのである。

彼のスケッチ (Selbstbiographie, GAB, S. 9ff.) には、彼の父が四十才を過ぎる頃から、フランス文学に興味を寄せ、殊にヴィクトル・ユゴーに傾倒していたことが記されている。この父の趣味は、息子にも受け継がれたようである。即ち Schäfer, Hans D. (SUP, S. 78f.) によれば、彼はフランス文学に親しみ、シャルル・ボードレールに感銘を受けたという。後に彼の創作上の範となる、このフランスの詩人は、彼にとってはまず人生の手本と見えたようである。ボードレール流に、つまり市民的職業に就くことなく生活することが当時の彼の望みであったらしい。それでも1878年に大学に進学すると、父の勧めにしたがって法律を学び始めた。しかし、この試みは一学期で挫折し、彼は父親に医学を学びたいという希望を述べている。父親は快く認め、彼は医学生となったが、長くは続かなかった。最初の試験の前に早くも飽きたものか、骨の標本には手もつけずに、植物の研究に夢中になっていたということである。彼のスケッチには目新しい医学用語や生物学の術語が、しばしば現れるが、この頃の産物であろう。また独特な食餌療法を始め、普通の食事の代わりに牛乳や生卵を大量に食べることもあったらしい。この奇妙な健康法は生涯彼の奇行の一部を成しており、様々なエピソードを生んでいる。

その間にも彼はギムナジウム時代の友人の家族が住むアルテンベルクを度々訪れ、友人の妹で、当時十三才のベルタ・レッヒャー (通称ペーター) に好意を感じていた。彼は直ぐに彼女との結婚を考え、学業を諦めて自立の道を探したいと父親に申し出る。父親は彼に商人の道を歩ませようとは考えていなかったが、少しでも文化的な関わりのあるものをと、シュトゥットガルトの書店で書籍業見習いをさせる手筈を整えた。しかし、田舎の素朴な人々の間での生活が性格に合わなかったものか、彼はここでも挫折するのである。半ば病気のようになった彼を父親が引取り、グラーツで再度法律を学ばせたが、数々の努力にもかかわらず資格取得には至らなかった。このような経緯を経て、ベルタとの結婚話は立ち消えとなったようであるが、彼の心の中にはその後も長く、彼女の思い出が残ることになるのである。彼は、彼女の写真を生涯部屋に飾り、日暮れには祭壇のようにランプを灯したという。彼が後に名乗るペーター・アルテンベルクというペン・ネームは、彼女の思い出に由来する (Kosler, S. 239f.)。

この様にして、彼は生来の素質をさらに助長する教育を受けたのである。両親の行った情操教育は効を奏して、彼の感受性はますます研ぎ澄まされていった。また早くから文学に親しみ、多くの知識を吸収したことは、後の文筆活動を進める上で大変有利になったのであろう。しかし、その教育はまた、彼の情緒不安定をも生み出したのである。彼は生涯、思春期的な落ち着きの無さを持ち続けることになったのである。

### 3. ボヘミアン生活—カフェー文化と創作活動

1882年、父の呼んだ著名な精神科医ルートヴィヒ・シュレーガーは、彼を「神経過敏」による

## 田 中 ま り

「就労不適格」と診断する。当時の勤勉な道徳を信奉する責任感の強い母親は、愛する息子に対するこの診断を受け入れられなかったようである。彼女は、彼の挫折を意思薄弱と勤勉さの欠如の結果ととらえ、精神医学的なケースには理解を示さなかった。そのため彼と母親との間には深い溝が生じ、その溝は母親の死の直前まで埋まることはなかったのである。一方父親は、文学などを通して精神病理的な知識や当時のデカダンスの風潮を理解していたであろう。父は医者診断に絶望すること無く、息子アルテンベルクに経済的な援助を与えることにした。やがて、彼は夜昼が逆転した生活を送るようになり、種々の本を濫読し、奇妙な健康法の研究にもますます熱心になっていったが、家族はそんな彼を持て余し、度々ゼメリングやグムンデンなどの保養地に送り出したようである。彼はグムンデンでの生活に大変満足し、後のスケッチにも様々な美しい風景を書き残している。物を書くことについての関心は、この頃すでに芽生えていたものか、妹宛の手紙にも小さな作品を書いているという。彼は、いつか自分の個性的なスタイルを生み出そうとしていたらしい。処女作品集『見るがままに』Wie ich es sehe の冒頭、全体のモットーとして掲げられている「私の杯は大きくない、しかし私はそれで飲む」というミュッセの言葉は、このアルテンベルクの心情を表しているもののようである。このようにして数年を送った後、彼は家族から離れて暮らすようになった。

ホテル住まいのボヘミアン生活は、1886年頃から始まった。父親から会社を受け継いだ弟のゲオルクのもとに暫く身を寄せた後、ヴァルマー通りのホテル「ロンドン」に小さな部屋を借りた。その後も年に何度か住居を変えたともいわれているが、定かではない。とにかく怠惰で気ままな暮らしぶりであったという。しかし、この通常の市民的規律に拘束されない気楽な生活態度こそ、彼にそのユニークで傍観者的な醒めた視点と、細やかな神経の知覚からもたらされる非凡な観察力を与えたといえるであろう。市民的な生活を送っていたのでは気付かないような視点と繊細な感覚で、大都市の繁栄と魅力、そしてまた欺瞞、偽善、貧困などの裏面をも彼はつぶさに観察していたのである。この時期の彼は、完全に父からの経済的援助に頼って生活していたわけであるが、後年作家となった際に、「休暇を与えてくれた」という表現で、これに感謝している (GAB, S. 10)。アルテンベルク自身、この「休暇」が彼の創作の重要な原点であることを自覚していたのであろう。

さて、このボヘミアンは住居は変えてもカフェでは決まった席を持つ常連であった。当時ウィーンには三百軒を超えるカフェがあったといわれているが (ブラッドショー、174頁)、そこは単にコーヒーを飲む場ではなかった。ヨーロッパ各国の、またアメリカの多数の新聞・雑誌が備えられ、一杯のコーヒーを前に何時間も過ごすことの出来たカフェは、一種のサロンやクラブの役割を担っていた。シュテファン・ツヴァイクもその著『昨日の世界』Die Welt von Gestern で、当時のウィーンのカフェに触れ、「あらゆる新しいものに対する最良の教養の場所」は常にカフェであり、それは「一杯の安価なコーヒーと引き換えに、誰でも近付きうる一種の民主的なクラブである」と述べている (Zweig, S. 47)。時折、給仕が水のはいったコップを取り替えるのは、長くいる客に、依然として歓迎の意を表すためであったというし、客がい

るかぎりは店を閉めないところも多く、カフェで夜明かしということも希ではなかったらしい。アルテンベルクのスケッチにも、朝の四時に、カフェで夜明けを待つ人々の姿が描かれている (Die Primitive, WS, S. 120)。彼も、もちろんその一員であつたに違いない。常連ともなれば、カフェで郵便物、洗濯物などを受け取ることも出来た。さながら第二の我が家といった観があるが、アルテンベルクのような住所不定のボヘミアンにとっては、さぞかし便利で快適な場所であつたろう。彼は、このカフェの片隅からウィーンの営みを眺めていたのである。様々な人々の、様々な人生模様が、彼の目の前で繰り広げられ、通り過ぎていったことであろう。また、色褪せた日常生活が、ほんの束の間、詩的な輝きを見せる瞬間も見逃さなかった。多くの場合凡人は、それに気付かないのだが、彼はそれを言わば発見したと言えよう。アルテンベルクは、こうして捉らえた印象の数々を、何時の頃からか覚書き風にまとめるようになったらしい。

もちろん、この便利な場所に集まったのは、彼のようなボヘミアンばかりではない。ウィーンのカフェを有名にしたのは、やはり文学カフェとしての評判である。特にカフェ・グリーンシュタイドルには「若いウィーン派」の作家たちが、ヘルマン・バルを中心として集い、ここを彼等の創作・発表の拠点としていた。後にこのカフェが取り壊された際に、カルル・クラウスは「とりこわされた文学」と題する文章を書き、ここでは給仕までも文学的な気取りに毒されているとけなしている。しかし、ここでは様々な才氣溢れる会話が交わされたのであって、それはまた、創作へのきっかけを与えたであろう。

カフェでの会話に対応するウィーン独自の文学形式として、ジョンストンが挙げている (180頁以下) のがフイエトーン *Feuilleton* で、あたかもカフェで気の向くままに、一気に書きとばされたような感のある、軽妙な味わいを旨とする文学ジャンルである。新聞の文芸欄であつたフイエトーンの限られたスペースには、堅苦しく重々しい論説より、いささか表面的であっても、アイロニカルで軽く、感覚的な短い文章が望まれていた。重苦しい時代の波から逃避するためにも、そこでは日常生活が、情緒こまやかに美しく描かれる必要もあつたであろう。

しかし、その様な事情とは別に、このジャンルが分裂的で、表面的にならざるをえなかった背景が存在する。当時のウィーンは、発展しつつある大都市の常として、帝国の各地方から多くの人口を受け入れていたが、そのことは彼等の持つ様々な価値観・思考様式、さらには言語をも引き受けることを意味した。この様に、絶えず異質な物を身のうちに含んでいたウィーン社会にあつては、体系的な思考と一元的な価値観を基礎とするような文学が育ちにくい土壌であつたといえよう。むしろ多元化した状況そのままに、断片的で機知に富み、洒落た飾りを施された文章が好まれたのである。ブロッホ、マグリスなどの文学史家は、ウィーンにおけるこの風潮に否定的な見方をしているが、ジョンストンは、フイエトーンの底にある、多様な価値観が共存する状況を泳ぎ渡るような思考様式こそが、ウィーンの知的生産性の鍵であつたとみなしている (656頁以下)。

ところでアルテンベルクがよく出掛けたのは、ブルク劇場に近いヘレンガッセ14番にあつた

## 田 中 ま り

カフェ・ツェントラル Café Central であったと言う。ここで、全くの偶然から彼の文才がシュニッツラーの目にとまることになる。1890年代の初め頃アルテンベルクは、すでに奇抜な服装と奇行で知られる、ある種の名物男になっていたらしいが、これといって特別な才能を示すわけでもなく、単なる「紛れもない無名人」(GAB, S. 64) に過ぎなかった。ウィーンの若手作家たちとも、ある程度、面識らしいものはあったが、彼の方から近づいていくようなことはなかったらしい。こうして彼の自伝的スケッチ『事のなりゆき』 So wurde ich (GAB, S. 65f) によれば、1894年の夏のある日、彼が文壇に登場する契機となった出来事が起こるのである。彼は事の顛末を次のように述べている。

私は神をおそれぬ人生の三十四番目の年に、詳細について日刊紙は伝えることはできないが、ウィーンのヘレンガッセのカフェ・ツェントラルのプリントされた英国の金色の壁掛けのある席に座っていた。私の前には、ピアノの稽古に行く途中、永久に姿を消してしまった十五才の少女の写真がのった「号外」があった。彼女は、ヨハンナ・W という名前だった。私は深く心を動かされた結果、四つ折り判に私のスケッチ『田舎の出来事』 Lokale Chronik を書いた。そこへアルトゥール・シュニッツラー、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール、フェリックス・ザルテン、リヒャルト・ベアホフマン、ヘルマン・バルが入ってきた。アルトゥール・シュニッツラーは、私に言った。「あなたが詩を書かれるとは、ちっとも存じませんでしたよ。一枚のポートレートを前にして、四つ折り判の紙に、何か書いていらっしゃる。これは怪しい！」

シュニッツラーが、かれの才能を認めたこのスケッチは、他の「若いウィーン派」の作家たちにも、拍手をもって迎えられた。ベアホフマンは、日曜ごとに催す「文学の夕べ」 literarisches Souper で、早速この小品をデザートとして朗読した。それを聞いたヘルマン・バルは、その三日後には早くも、アルテンベルクに雑誌『時代』〈Die Zeit〉への執筆を依頼してきたという。さらに、カルル・クラウスは、アルテンベルクの他のスケッチを探し集め、推薦状まで添えて、ベルリンの出版社、フィッシャー書店に送った。フィッシャーの方でも、彼を「発見」したため1896年、彼の処女作品集『見るがままに』 Wie ich es sehe が出版の運びとなったのである。こうして彼は、偶然にも、三十七才になって作家としての人生を歩むことになったわけであるが、前述の『事のなりゆき』(GAB, S. 66) で、この人生の転機について、もしあの時、何か月もたまっていたコーヒー代の勘定書をメモしていただけたら、こうはならなかっただろうと、ユーモアを込めて回想している。こうして作家アルテンベルクは、まさにカフェ文化のなかから生まれたのであった。

この作品集が出版されるやヘルマン・バルは、雑誌『時代』に、その独特な新しい表現を絶賛する一文を発表、最も気に入った作品として『十二才』 Zwölf の全文を紹介している



(Wunberg, S. 588)。そもそもアルテンベルクの魅力を語るためには、作品そのものを示さなくては到底伝えられないかのようである。パールに続いてホーフマンスタールも歓迎の辞を贈っている。

#### 4. 作家アルテンベルクとその作品の受容

この処女作品集以後『アシャンテ』 Ashantee (1897)、『日ごと囁くもの』 Was der Tag mir zuträgt (1901)、『前触れ』 Prodoromos (1906)、『特選集』 Die Auswahl aus meinen Büchern (1908)、『人生のメールヒェン』 Märchen des Lebens (1908)、『ささやかな人生の絵物語』 Bilderbögen des Kleinlebens (1909) などが次々に出版された。

ところで作家となった後も、彼のボヘミアン生活は変わらなかった。彼は依然として父やその後を継いだ弟から経済的援助を受けていたのである。ところが、1905年、弟の会社の銀行が破産、その援助を期待できなくなり、困難な状況に立たされることになったらしい。彼と一時期同棲していたヘルガ・マールブルク (Kosler, S. 245f.) によれば、彼は水泳を好み健康には自信があったらしいが、神経は大変デリケートで、このような経済的不安、度重なる心配ごとや、睡眠不足などで散々な状態であったという。さらに不安を紛らわし眠りを誘うために飲んでいったアルコールが、状況をより悪化させたと見られる。1909年、とうとう神経症とアルコール中毒症により、ウィーンファンゴ療養施設への入院を余儀なくされた。このとき治療に当たった医師たちは、彼の神経過敏には気が付かず、もっぱら飲酒防止と鎮静のために睡眠薬を大量に投与したようである。この薬が、彼の精神にますます悪影響を及ぼしたもののようで、以後十年にわたって、精神病院への入退院を繰り返す事になる。この時期の作品には、『最近の回想』 Neues Altes (1911)、『ゼメリング1912年』 Semmering 1912 (1913)、『穫り入れ』 Fechsung (1915)、『落ち穂拾い』 Nachfechsung (1916)、『生そのもの』 Vita ipsa (1918) がある。これらの作品には、幼年期についての多くの回想が含まれているらしい。自らの晩年と帝国の黄昏を重ね、昔日を懐かしむ気持ちが強まったのであろうか。彼には、どんな形であれ、やがてウィーンのベル・エポク belle époque は終わるという予感があったのである。その予想通り、1918年秋、オーストリア帝国は崩壊し、帝政も終わりを告げる。それから僅か数か月後、1919年1月8日に、この古き良きオーストリア、陽気なウィーンそのもののような作家アルテンベルクは、六十才の誕生日を待たずにウィーンの病院で肺炎のために世を去った。生涯、吝嗇家としても名の通った彼は、十万クローネを「児童保護及び社会救済」のために遺したそうである。

彼の墓碑は、友人の建築家アードルフ・ロースによって設計され、墓碑名は、彼の希望とおり、「彼は愛しそして見た。」 Er liebte und sah! (GAB, S. 11) と刻まれた。死後、生前編集されていたらしい『我が人生の夕べ』 Mein Lebensabend (1919) と、最後のスケッチを含む『遺稿集』 Nachlass (1925) が出版、他にカール・クラウス編集の選集など、何冊かの作品集が第二次対戦後に出版されている。

## 田 中 ま り

ところで印象主義作家アルテンベルクは、当時のウィーン文化から生まれてきたのであるから、彼の文学がウィーンの文壇で歓迎されたのは当然といえば当然かもしれない。しかし、さらに、その作品は当時の一般の読者にも広く受け入れられていたようである。これについての詳細な資料は未見であるが、例えば Köwer, Irene (S. 327f.) によると、代表作『見るがままに』は、1896年から1928年までの三十二年間に二十版を重ねており、一方、晩年の作品集も数年間に十版前後重版されているという。なかでも、『生そのもの』は、僅か一年の間に十版を数えるという売れ行きであった。また彼の二冊目のスケッチ集『アシャンテ』についての書評のなかで Messer, Max (Wunberg, S. 722f.) は『見るがままに』への大きな反響について触れている。このような証言から、アルテンベルクは、世紀末から今世紀初頭にかけての割合短い期間に、多くの読者を集めていたのではないかと思われる。

もちろん、その魅力は、まず、当時のウィーンの風潮に適った洒落た作品のスタイルにあったが、さらに、描かれたテーマ・対象にも読者はひかれたであろう。すなわち彼が、そのスケッチで描いたのは、ほとんどが世紀末の年ウィーンの人々の生活であり、様々なウィーン的なものであった。軽やかなタッチと淡い色使いで、数多くの情景を、美しく気の効いたミニチュアに仕上げたのである。かつ、その中には常にはかない輝きがたたえられ、賑やかで陽気な都会的風物、優雅で上品な上流夫人のたたずまい、洒落た会話や、気の効いた交わり、瀟洒な別荘の世界が広がっている。これらの描写素材が、ある種の満足感を当時の人々に与えたのであろう。スケッチの中で展開される上流市民の優雅な生活カタログや、都会風のエピソードは、或る人々にとっては、一種の憧れであり、また他の人々にとっては、自らの自惚れ鏡でもあった。とすれば彼の作品は、特にウィーンの人々、そして、大都会、ウィーン、ウィーン的なもの、また都市文化的なものに憧れる多数の読者をひきつけたであろう。また第一次大戦後のウィーン子にとっては、懐かしい古き良き都の姿を伝える格好の文学でもあったであろう。

このような一般の受容と平行して、アルテンベルクに関する評伝・研究文献も、すでに彼の存命中から出版され、没後も1920年代初めにかけて、なお二、三の文献が見られた。しかし、その後は第二次世界大戦が終わるまでの約二十年間、全く文献が見当たらないようである。これはもちろん、この時期、ヨーロッパ全土が戦場と化し、混乱と激動の最中にあったことも大きな原因と考えられるが、何より、彼が全く忘れられた存在であったからであろう。まずその理由として考えられるのは、二十年代以後の反ユダヤ的風潮、ナチスの台頭、ナチスによるオーストリア併合という時流の中で、ユダヤ系作家と見られた彼には、全く機会はなかったということであろう。それに、仮にユダヤ排斥運動が無くても、彼の作品は、世紀末ウィーンに過度に依存していたので、単なる過去の流行作家、風俗作家として見過ごされる運命にあったかもしれない。しかし、これらの見解は戦後の1945年以後修正され、Kindler (S. 1110) によれば、特にアメリカで関心が持たれるようになり、今日では、作品の内容や題材、印象主義との関わり、作品の形式・ジャンルに関する研究等様々な観点から研究が進められている。

## 結

## び

ペーター・アルテンベルクを印象主義作家としたものは何であったのか。以上のような生涯にわたるボヘミア的な生活態度、そして「見るがままに」描き続けた創作の姿勢が、紛れもなく、その作品の形式、すなわち短く、詩的・暗示的な散文スケッチの形式に、決定的に関わっていたであろう。彼は、書斎にこもり、腰を落ち着けて大掛かりな長編ロマンを生み出すタイプではなく、カフェを仕事場とし、ホテルに住み、常に人々の傍らで、人生のメールヒエンを見つめ、耳を傾けてきたのである。それゆえ言葉は、生き生きとした印象、エスプリ、ウィットに富んだものになった反面、論理的思考を構築することは困難になったであろう。彼の文学の生命は、鮮やかな印象の巧みな描写である。それがアルテンベルクのスタイルであり、彼を印象主義作家と定義づける重要な要因でもある。しかしここで、彼の特異な素質に加え、施された教育が、印象主義が必要とする感覚の鋭さを用意し、時代の風潮がそれを歓迎したということも確かであろう。

さらに時代に注目するならば、ジョンストンが提案するような時代のキーワードとしての印象主義は、確かに大きい影響力を持つであろう。印象主義とは、プラスに解釈すれば多様化、多元化ということであり、マイナスに解釈すれば解体、形式の崩壊ということになる。

そもそも当時のウィーンには、余りにも多くの様式・潮流が混在していたため、それを一つの文化的なカテゴリーにまとめるのは困難であるとも言われている。この時代を生き、それが過ぎ去った後ただちに、時代を振り返る作業にとりかかったヘルマン・ブロッホは、「価値真空」という用語で、様々な価値体系が混在し、ついには統一的価値体系が崩壊していった、この間の状況を表そうとしている。他の文化史家の見方においても、この時代の文化の流れは断片的で、全体としてのまとまりを欠くとの意見が優勢である。それに対して、社会学者ジョンストンは、この時期の文化的な様式を、「印象主義」という用語でまとめることを提案している。彼は、印象主義を、文学、美術・音楽の形式として限定することなく、この時代を代表する世界観ととらえている。特に印象主義の一つの大きな特徴とされる断片性は、他の文化史家の見方とも一致し、ブロッホの見方をも包括しうる。

このような観点から見れば、「印象主義の代表的作家の一人」であるペーター・アルテンベルクの生涯と、その文学の背景は、また「印象主義」様式の一つのモデルを示しているとも言えよう。

## 注

アルテンベルクの文体に関しては拙論『印象主義作家としてのペーター・アルテンベルク—その文体について』でその概要を示した。

## 参 考 文 献

Altenberg, Peter: Wie ich es sehe. Berlin 1904, <sup>12-15</sup>1919=WS

- Altenberg, Peter: Das grosse Peter Altenberg Buch. Hrsg. v. W. J. Schweiger. Wien/Hamburg 1977=GAB
- Altenberg, Peter: Expedition in den Alltag. Gesammelte Skizzen 1895~1898. Wien/Frankfurt 1987
- Altenberg, Peter: Sonnenuntergang im Prater. Auswahl und Nachwort v. H. D. Schäfer. Reclam: UB. Nr. 8560. Stuttgart 1968=SUP
- Altenberg, Peter: Nachlese. Hrsg. v. M. Mautner. Wien 1930
- ブラッドショー・海野訳: カフェの文化史 ポヘミアンの系譜—スフィートからボブ・ディランまで 東京1984
- Brauneck, Manfred (Hrsg.): Autorenlexikon deutschsprachiger Literatur des 20. Jahrhunderts. Reinbek 1984, S. 15f.
- ブロッホ・菊池訳: ホフマンスタールとその時代—二十世紀文学の運命 東京1971
- Deutsches Literatur-Lexikon. Biographisch-bibliographisches Handbuch. Begr. v. W. Kosch. Bern/München 1978, S. 157-168
- Fliessbach, Holger: Wie ich es sehe. In: Kindler Literaturlexikon. Bd. VII, Sp. 1110f. Zürich 1972
- Friedell, Egon: Peter Altenberg. Zu seinem fünfzigsten Geburtstag (1908) In: Mathes, Jürg (Hrsg.): Theorie des Literarischen Jugendstils.
- GAB=Altenberg, Peter: Das grosse Altenberg Buch.
- Hamann, Richard/Herrmand, Jost: Impressionismus. Epochen deutscher Kultur von 1870 bis zur Gegenwart. Bd. 3. München 1972
- ユイスマンス・澁澤訳: さかしま 東京 1985, 287-288頁
- 池内 紀: 道化のような歴史家の肖像 東京1988
- 池内 紀: 闇にひとつ炬火あり—ことばの狩人カール・クラウス 東京1985
- 池内 紀(編): ウィーン聖なる春 東京1986
- Johnston, W. M.: Viennese Impressionism. In Focus on Vienna 1990. München 1982 S. 1ff.
- ジョンントン・井上 他訳: ウィーン精神 ハプスブルク帝国の思想と社会1848—1939 2巻 東京1986
- Johnston, W. M. [Otto Grohmann 訳]: Österreichische Kultur- und Geistesgeschichte. Gesellschaft und Ideen im Donauraum. 1848 bis 1938. Wien/Köln/Graz 1974
- Karthaas, Ulrich (Hrsg.): Impressionismus, Symbolismus und Jugendstil. Stuttgart 1977
- Kosler, Hans Christian (Hrsg.): Peter Altenberg. Leben und Werk in Texten und Bildern. Frankfurt a. M. 1984
- Köwer, Irene: Peter Altenberg als Autor der literarischen Kleinform. Untersuchungen zu seinem Werk unter gattungstypologischem Aspekt. Frankfurt a. M. u. a. 1987
- Kunisch, Hermann (Hrsg.): Handbuch der deutschen Gegenwartsliteratur. 3 Bde. München 1969-70. Bd. 1, S. 62
- Langen, August: Deutsche Sprachgeschichte vom Barock bis zur Gegenwart. In: Deutsche Philologie im Aufriss. Hrsg. v. Wolfgang Stammeler. Berlin 1957. Bd. 1, Sp. 1358ff.
- マグリス・鈴木 他訳: オーストリア文学とハプスブルク神話 東京1990
- Mann, Thomas: Peter Altenberg. In: Altes und Neues. Frankfurt a. M. 1961
- マンハイム/シェラー・秋津/吉田訳: 知識社会学 東京1973, 152~204頁
- Martini, Fritz: Deutsche Literaturgeschichte. Stuttgart 1984. S. 481f.
- マルティニー・高木 他訳: ドイツ文学史—原初から現代まで 東京 1984
- Mathes, Jürg (Hrsg.): Prosa des Jugendstils. Stuttgart 1982
- Mathes, Jürg (Hrsg.): Theorie des literarischen Jugendstils. Stuttgart 1984
- Mautner, Marie: Dem Andenken meines Bruders. In: Nachlese. Wien 1930
- マウトナー・田中訳: 兄ペーター・アルテンベルクの思い出 金沢大学独文研究室報 第7号 (1990) 所

収

モル・万沢訳：キッチュの心理学 東京1986

日本独文学会編：ドイツ文学辞典 東京1956, 11頁

Österreichisches Wörterbuch. Herausgegeben im Auftrag des Bundesministerium für Unterricht und Kunst. Wien 1979

Prang, Helmut: Impressionismus. In: Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. Berlin 1958, Bd. 1, S. 749f.

Ringseis, Franz: Neues Bayerisches Wörterbuch. Pfaffenhofen 1985

ロート・平田/吉田訳：放浪のユダヤ人 東京1985

Schäfer, Hans Dieter: Peter Altenberg und die Wiener "Belle Epoque" In: SUP, S. 78ff.

ショースキー・安井訳：世紀末ウィーン—政治と文化 東京1983

Simpson, Josephine M. N.: Peter Altenberg: a neglected writer of the Viennese Jahrhundertwende. Frankfurt a. M. u. a. 1987

SUP=Altenberg, Peter: Sonnenuntergang im Prater.

テイラー・倉田訳：ハプスブルク帝国1809～1918—オーストリア帝国とオーストリア＝ハンガリーの歴史 東京1987

田中まり：印象主義作家としてのペーター・アルテンベルク—その文体について 北陸学院短期大学紀要 第21号 (1989) 所収

Wagner, Nike: Geist und Geschlecht. Karl Kraus und die Erotik der Wiener Moderne. Frankfurt a. M. 1982

ワグナー・菊盛訳：世紀末ウィーン—の精神と性 東京1988

ウィーンの光と影 (特集) : ユリイカ 7月号 東京1987 47～279頁

Wilpert, Gero von: Deutsches Dichterlexikon. Stuttgart 1976, S. 9

Wilpelt, Gero von: Sachwörterbuch der Literatur. Stuttgart 1989

WS=Altenberg, Peter: Wie ich es sehe

Wunberg, Gotthart (Hrsg.): Das Junge Wien. Österreichische Literatur- und Kunstkritik 1887-1902. Bd. I: 1887-1896, Bd. II: 1897-1902. Tübingen 1976

Zweig, Stefan: Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers Berlin 1965

ツヴァイク・原田訳：昨日の世界 2巻 ツヴァイク全集19、20巻 東京 1982